

9 体 育 科

川中昌樹・須山博充

1. 研究の経過

学ぶ意欲を大切に、生涯スポーツの実践力を育てることが小学校の体育における中心的な課題になっている。このことは、子どもたち一人一人に運動の楽しさや喜びを味わわせ、満足感や達成感を得させることによって、より運動好きな子どもを育てていくことが求められていると言える。

本校では、平成2年度から個が生きる授業をテーマに研究をすすめてきた。個が生きる体育科授業の姿は、児童と児童、児童と教師のかかわりによって生まれるものであるととらえてきた。ここでは、集団思考場面を入れた課題解決や技術の習得は十分になされたが、教え合いの態度をどう高めるかが課題として残された。また、平成3年度からの個が生きる授業と評価の研究では、観点別の達成目標による授業構成や評価を行うことにより、そのあり方の一部を明確にすることができた。しかし、意欲・関心・態度や思考・判断の観点の目標設定の仕方の検討が必要であった。

さらに、平成4年度は運動の楽しさや喜びを味わうことができる体育授業を通して、自己を高める評価力の育成をめざしてきた。ここでの研究の成果は、子どもたちの活動の過程をしっかりと見つけ、肯定的に評価することの大切さを認識できたことである。しかし、子どもたち一人一人の内面にもっと着目する必要があるという課題も残った。

この3年間の研究は、「わかる・できる」喜びを味わわせることをめざして、子どもたち相互が見合い、教え合いながら学習することを授業づくりの柱にしてきた、とまとめることができる。

一方、現在の子どもたちを取り巻く生活環境は、友達との遊びの減少、人のかかわりの希薄化、競争意識、能力主義を一層助長する傾向にある。こうした中で生活している子どもたちは、心のつながりに目を向けようとする意識が薄れてきているように感じられる。また、忙しい生活を送る子どもも増え、心の状態が不安定である子どもも多い。

これらの研究課題や背景から、より一層子どもたち一人一人の内面に着目した授業づくりをする必要があると考えるに至っている。

2. 感性を育むということ

本校体育科では、感性を「価値あるものに気づく感覚」と考えた。この感性を育むことがなぜ必要なのかについて、体育科が他の教科と異なる特性をいくつか上げながら述べてみたい。

一つ目は、体育は運動技能を媒介にしながら、うまくなること、できるようになることをめざして学習がすすめられるという点である。この運動技能は、知的な働きやセンチメンタルな面の働きによってその表出のしかたが左右されやすい。これら心理的な働きが、その子どもの行動の仕方（態度）を左右するとも言える。また、心理的な働きは、その子ども本人の価値観によるところが大きい。このことは、学習する仲間との人間的なつながりも運動技能の表れ方に影響を与えると考えることもできる。つまり、運動技能を問題にしながらも、子ども一人一人の心の状態や価値観、さらに先生や友達との心のつながりが現れやすい教科であると言える。

二つ目は、子どもが「動きたい」という生理的な欲求を満足させ得る教科であるという点である。知的な満足を得ることも当然あり得るが、何よりも「十分動いて気持ちよかった」、「すっきりした」という生理的な満足感を味わわせ得る教科である。しかし、本校では、子どもの満足感は生理

的な満足感だけにとどまっていたは不十分だと考えている。生理的な満足感に加えて、心の満足感を味わえることこそ、子どもにとって「やってよかった」、「本当に楽しかった」、「またやりたい」と思わせるものであり、こうした経験を積み重ねていくことが、子どもを運動好きにさせ、自ら学ぶ意欲を育て、生涯スポーツの実践力を育てることにつながると考えている。

体育の授業のこうした特性を考えると、子どもたちが、何に価値を見いだしていくかが、運動技能の習得過程において非常にかかわりが深い

このように、体育においては、運動技能を問題としながらも心の側面は決して無視できない。これまでの研究においても、「わかる・できる」喜びを味わわせることをめざして、子どもたち相互が見合い、教え合いながら学習することを授業づくりの柱にしてきたことは先にも述べた通りである。学習集団が、心のつながりが深ければ、雰囲気は受容的で相互啓発が活発に行われやすい。排他的で自己中心的な集団では、相互啓発が活発に行われにくい。特に、運動技能は直接目に見えるものだけに、そのできばえが問題にされやすい。運動技能のできばえのみに着目して果してすべての子どもに心の満足感を味わわせることができるだろうか。運動を科学的にみる目を養い、友達の心情に豊かに気づく感性を育むことにより、教材と子ども、教師と子ども、子どもと子どものつながりをより深め、心の満足感をすべての子どもに味わわせたいと考えている。

こうした授業を通して、友達のがんばりとか、一生懸命に取り組む姿に心を動かし、友達と共に喜び合え、思いやれる心情を育むことができれば、それは体育という一教科にとどまることなくよりよい生き方の追求に生きて働く力になると考えている。

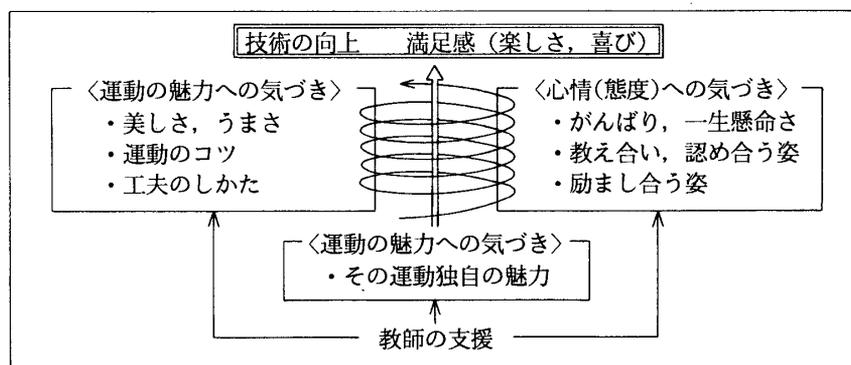
3. 感性を育む授業づくり

これらのことをふまえると、感性を育む授業づくりでは、第一に「価値あるもの」が生み出される授業でなければならない。教師は、子どもに与える教材の中にどんな「価値あるもの」が生み出され得るのかを吟味する必要がある。次に、どうすればそれが生み出されていくのかを見通しておかなければならない。この段階で教師の価値観、つまり、子どもに感じ取らせたい「価値あるもの」を教師がどう考えているかがものを言うといえる。

感性を育む授業づくりのあり方を明らかにするために、本年度はこれまでの本校の研究成果をベースにし、次のような手順で実践をした。

- ① 教材から生み出され得る「価値あるもの」とは何かを具体的に明らかにする。

その際、子どもたちの感性がはたらくと思われる場面を次のようにとらえてみた。



- ② 「価値あるもの」に出会えるためには、どのような授業づくりをすべきか、教師の支援のあり方はどうあるべきかを検討し、授業実践をする。
- ③ 教師のとらえた「価値あるもの」と子どもの感じた「価値あるもの」の違いを比較し、授業づくりの条件と教師の支援のあり方を再検討する。